論文の内容の要旨

論文題目　　**Social Capital and Armed Conflict in Somalia**
(ソーシャル・キャピタルと武力紛争：ソマリアを事例として)

氏名　　松　川　潔

本研究の目的は、ソマリアにおけるソーシャル・キャピタルと武力紛争の関係を明らかにすることである。ソマリアにおける武力紛争を分析するため、研究上の理論的枠組みとしてソーシャル・キャピタル理論を用いる。ソマリアの五つの都市における暴力とソーシャル・キャピタルの分散を定量的に分析し、そのうち三つの都市に関しては定性的な事例研究も行う。本研究のリサーチ・クエスチョンは次の通りである。ソーシャル・キャピタルは武力紛争を助長するか、それとも緩和するか？あるいは、武力紛争はソーシャル・キャピタルに影響を与えるか、もし与えるならば、どのように与えるか？どのようなソーシャル・キャピタル（例えば、「結束的 bonding」、「連携的 bridging」、「連結的 linking」）が武力紛争を助長し、どのようなソーシャル・キャピタルが武力紛争を緩和するか？

本研究の分析枠組みとして、六つの尺度で測られるソーシャル・キャピタルを独立変数、武力紛争を従属変数とする。定性的研究に関しては、2004 年から 2013 年に実施したフィールドワークに基づく二次データおよび一次データを用いる。定量的分析においては、二次データの大標本（large-n）に基づき、六つのソーシャル・キャピタル尺度に関する記述的推論を行うことで、変数間の関係と傾向を明らかにする。本研究が分析枠組みとして用いるソーシャル・キャピタル尺度とは、「集団および集団ネットワーク（groups and group networks）」「個人的ネットワーク（personal networks）」「信頼（trust）」「社会的結合と包摂（social cohesion and inclusion）」「アイデンティティ（identity）」「コミュニティのリーダーシップ（community leadership）」である。これらの尺度を用いることで、定性的および定量的分析において、「結束的」「連携的」「連結的」ソーシャル・キャピタルを概念上区別し、各ソーシャル・キャピタルが武力紛争にいかなる影響を持つかを分析する。本研究が取り扱う五つの都市は、ラス・アノド（Las Anod）、ボサソ（Bosaso）、モガディシュ（Mogadishu）、ブラオ（Burao）、ガルカイヨ（Galkayo）である。本研究は以下の五つの章で構成される。

第一章では、本研究の課題と概要を述べる。ソーシャル・キャピタルと武力紛争に関する先行研究をレビューした後、本研究が用いる方法論を紹介する。本研究では、ソマリアの三つの都市（ブラオ、モガディシュ、ガルカイヨ）に関する詳細な定性的分析と、二次データのロジスティック回帰分析を行うとともに、研究計画を提示する。

第二章では、本研究の分析枠組みと仮説が提示される。そのために、ソマリアの略史と武力紛争の「根本的原因（root causes）」を概説し、続いて、独立変数と従属変数について説明する。そして、分析枠組みと仮説、および関連する理論的予測を提示する。

ソーシャル・キャピタルと武力紛争に関する仮説は次の通りである。
【仮説①】連携的ソーシャル・キャピタルは武力紛争に負の影響を与える（紛争を緩和する）。
【仮説②】結束的ソーシャル・キャピタルは武力紛争に正の影響を与える（紛争を助長する）。
【仮説③】強制的な連結的ソーシャル・キャピタル(hard linking social capital) は武力紛争に正の影響を与える（紛争を助長する）。
【仮説④】非強制的な連結的ソーシャル・キャピタル(soft linking social capital) は武力紛争に負の影響を与える（紛争を緩和する）。

強制的な連結的ソーシャル・キャピタルとは、政府高官や軍指導者、企業経営者がコミュニティに対して強制的な権力を有し、リーダーシップの有無に関わらず、両者が排他的な垂直関係にあることを意味する。非強制的な連結的ソーシャル・キャピタルとは、包摂的な垂直関係を意味する。後者の場合、リーダーシップを担う地位にある人々がコミュニティにおける権威的・強制的な権力を持っているかは重要ではなく、例えば、氏族の長老や宗教指導者、専門家、NGO のリーダーなどがこれに当る。

ソマリアの五つの都市に対する理論的予測は次の通りである。
【予測①】ボサソとブラオは、モガディシュ、ガルカイヨ、ラス・アノドに比べて、連携的ソーシャル・キャピタルの度合いが高い。
【予測②】モガディシュ、ガルカイヨ、ラス・アノドは、ボサソとブラオに比べて、結束的ソーシャル・キャピタルの度合いが高い。
【予測③】モガディシュは、他の四つの都市に比べて、強制的な連結的ソーシャル・キャピタルの度合いが高い。
【予測④】ブラオとボサソは、モガディシュ、ガルカイヨ、ラス・アノドに比べて、非強制的な連結的ソーシャル・キャピタルの度合いが高い。

また、上記の分析枠組みは、ソマリアの市民社会と慣習法に関する背景説明にもなる。最後に、研究計画上の限界と課題に触れて本章を締めくくる。

第三章では、記述統計学および推測統計学を用いて、二次データの大標本セットの定量的分析を行う。前述の分析枠組みに基づき、国家単位（各都市の集計）および都市単位におけるソーシャル・キャピタルと武力紛争の関係をロジスティック回帰分析にかける。また、本章では、定性的分析を行うために三つの都市（ブラオ、モガディシュ、ガルカイヨ）に関して判別分析を行う。最後に、前述の仮説および理論的予測に対する定量的分析の結果を比較する。結論を言えば、本研究の分析枠組みに基づいてロジスティック回帰分析を行った結果、仮説③および仮説④と（部分的ではあるが）理論的予測①のみが立証された。モガディシュでは、武力紛争

の度合いが高く、連携的ソーシャル・キャピタルの度合いが低い、さらに結束的ソーシャル・キャピタルの度合いは多様である。ボサソとブラオでは、武力紛争の度合いが低く、結束的ソーシャル・キャピタルと連携的ソーシャル・キャピタルの度合いが高い。ガルカイヨとラス・アノドのソーシャル・キャピタルの度合いに関しては、確かな結論が得られなかった。

第四章では、ソーシャル・キャピタルと武力紛争の定性的分析を行う。ブラオ、モガディシュ、ガルカイヨという三つの都市におけるフィールドワークを通して収集した二次データおよび一次データを用いる。これら三都市に関する文脈と背景、紛争状況を確認した後、各都市における六つのソーシャル・キャピタル尺度を分析する。最後に、前述の理論的予測に対する定性的分析の結果を比較する。分析の結果、理論的予測①が立証された。ブラオでは、ガルカイヨとモガディシュに比べ、連携的ソーシャル・キャピタルの度合いが高かった。理論的予測②に関しては、ブラオの結束的ソーシャル・キャピタルの度合いは高く、ガルカイヨおよびモガディシュと同等であった。そのため、予測②は退けられた。理論的予測③、すなわち強制的な連結的ソーシャル・キャピタルについては、ブラオにおける度合いは高く、予測③も退けられた。モガディシュとガルカイヨでは、非強制的な連結的ソーシャル・キャピタルの度合いが高く、理論的予測④に関しても予測の通りではなかった。結論として、定性的分析の結果、ブラオの事例が理論的予測②および③を退け、ガルカイヨとモガディシュの事例が予測④を退け、予測①のみが立証された。

第五章では、定性的分析および定量的分析の結果を要約する。そして、分析結果に照らし合わせて仮説を検証する。また、三つの都市に関する理論的予測を定性的および定量的に検証する。最後に、学問的インプリケーションおよび政策的インプリケーションを提示し、ソーシャル・キャピタルと武力紛争に関する今後の研究課題を示して本章の結論とする。定性的分析と定量的分析の両方の結果から、全体として、仮説①と仮説③が立証された。すなわち、連携的ソーシャル・キャピタルは武力紛争に負の影響を与え、強制的な連結的ソーシャル・キャピタルは武力紛争に正の影響を与える。四つの理論的予測に関しては、予測①のみが立証された。つまり、ボサソとブラオは、モガディシュ、ガルカイヨ、ラス・アノドに比べて、連携的ソーシャル・キャピタルの度合いが高かった。本研究で明らかになった学問的インプリケーションは、ソマリアのように長期化した武力紛争を分析する際、ソーシャル・キャピタル理論を用いることが有益だということである。政策的インプリケーションとしては、市民社会団体による連携的ソーシャル・キャピタルの発展には限界があり、国家による連携的ソーシャル・キャピタルの構築が重要だということが明らかとなった。